

震災の街は動きだしていた

【学生記者】滝沢孝祐（総合政策学部一年）

弁当屋さんが営業している！

おいしそうな揚げ物の匂いが、殺伐とした街中に流れていた。思わず、その匂いに釣られるようにして弁当屋さんの暖簾をくぐった。そこには大好物の「野菜炒め弁当」の文字が。野菜があるのか……!?

「うちは、なんとか材料をやりくりしながら、地震の翌々日から営業してるよ」

記者の質問に、十日町市街地にあるお店の主人はそう答えた。11月2日、地震発生から10日めのことである。まさか被災地で「野菜炒め弁当」が食べられるとは……店主の心意気に頭が下がった。

10月23日（土）午後5時56分……。お隣群馬県の赤城山中の揺れもただ

ことをお断りしておきたい。

災害救援ボランティアセンター

列車で現地入りした記者を出迎えたもの、それは——駅前にとまる、東京にいるような制服姿の女子高生たちだった。彼女たちはふだんとなんら変化ないようにおしゃべりに興じていた。比較的被害が軽度であった十日町市とはいえ、とその光景にちょっと驚いたのだが、後で聞くと、高校はすでに授業が再開されたところもあり、目にしたのはその生徒たちだったようだ。

まずは、ボランティアセンターで登録を、と現地に設けられている災害救援ボランティアセンターに向かった。

臨時のセンターとなっている建物には、震災後緊急に行われた家屋診断で「注意」の旨の張り紙がある。受こも、地震の被害施設なのだ。受付、オリエンテーションともスムーズで、センターのスタッフに話を聞

くと「ニーズ情報を見てもらい、現地へ行ってもらいます」とのことであった。

ニーズとしては、僕でもできる地震で倒れた家具の片付けから、介護・福祉の専門的な人材を求め声まで多数。とはいえ、記者は公共交通機関を使って現地入りしたため、一人で行動できることは限られていた。なにしろ長野県境に位置する山間部地域であり、車がなければ移動が難しいのだ。「自家用車での現地入りは避けてください」と事前に各所でアナウンスをしていたのを思い出すが、実際には車がないと現地での移動手段に困るという問題もあり、難しいところだ（新聞によると、「バイク部隊が活躍」のようだ）。

記者は宇都宮から来たという大工さんの車で、国学院大学の学生と共に、地域での後片付け作業に向かった。数件に赴いたがどの家でも、タンス等の家具類が倒れており、地震の凄さを物語っていた。また、手伝いに

ことではなかった。前夜から、帰省していたのだが、恐ろしい揺れにたじろぐばかりだった（後に、震度5弱と判明）。もっとも、上越国境を越えた新潟県がこのような状況になつているとはつゆ思わなかった。

テレビ各局が刻々と新潟県の深刻な状況を伝えはじめた。現地から報道を聞くたびに、もどかしい思いが募ってきた。

11月2日、ようやく現地入りすることができた。ボランティアとして人々の手伝いをしたいという気持ちから新潟行きを決めたのだが、そこには被災地の実際を知りたいという気持ちがあったのも事実だ。

以下のルポは記者が見聞した範囲のものであり、必ずしも被災地の全容を明らかにしているわけではない



後藤晶さん

活躍する中大生

うかがった家は一人暮らしの方が多く、「片付けられるものは一人でなんとかしたが、大きいものはとてもとても」という声がほとんどだった。ボランティアの集中する土日を避けて現地入りしたのだが、意外に記者にできる活動は多くなく、手もちぶさたの時間が多かったのも事実である。いくつかの要因が考えられるが、それは後述する。

全国各地から多くのボランティアが参加していたが、中央大学からも学生が多数参加したと聞いた。総合政策学部1年の後藤晶君もその一人である。彼は10月30日から11月2

日までの4日間、新潟県災害ボランティア本部中越センターで情報管理（救援物資の配分作業の管理など）

や、特に被災がひどい川口町のボランティアセンター設立にかかわる一方で、現場の声を幅広く聞いて回ったという。後藤君に話を聞いた。

——今回はどうして現地へ？
「報道を聞いて、頭に、子どもとお年寄りの顔が浮かんだんだ。子どもと遊び・学ぶ活動を続けていたせいもあったし、家にじいちゃんとは

あちゃんがいることもあって、『今、子どもたちやじいちゃんたちはどうしているんだろう』って想像したら、いてもたってもいられなかった」

——現地のボランティア本部にいたんですね。

「はい。地元のJＣ（青年会議所）

の方々などと活動をしました。そこでの問題は、ヒトもモノも需給関係がぴたりこないことでした。ヒ

トに限っていえば、ボランティアに対する需要が多いときに限って少なかったり、また避難勧告が発令されていて家屋の片付けができない時には、休日も重なりヒトが多くなったり。

救援物資も、本場に『救援』という感じのものばかりで。避難生活が続くにつれて生活水準が向上すると、カンパンや菓子パンは余ってきます。

毎日カンパンなどを食べて暮らせるわけでもないですから。消費期限が切れた菓子パンを大量に捨てるのを見た時は、なんとも言えない気持ちでした」

——現地において困ったことは。
「少し腹が立ったのは、ボランティア用の休憩所があって、そこで休んでいたボランティアたちが後片

付けをしないで帰ることがあって、その片付けに半日もかかってしまった。さすがに、なんか違うだろう、

とあって、グサリと心にくるように注意を呼びかけました（笑）」

——現地から帰る時に、何か不安は残りましたか。

「子どもが遊ぶ環境がなかった。僕が持っていた折り紙や、あやとりが役立つしました。みんな楽しそうでも、子どもの一人が『友達が見えなくなった』と言うのを聞いた時は、精神的に辛いだらうなと思いました。今後は心のケアが心配です。

それに、川口町のボランティアセンターは県外から来たスタッフばかりで、地元の人のかかわりが少ない。今後、いつかは地元の人に引き継がなければならず、運営体制に不安が残りました」

熱い思いが率直な意見としてあふれ出る。

彼はこうも言った。「今回の被災地は高齢化率が軒並み25%を超えている町村で、人口の4人に1人はお年寄り。これから訪れる高齢社会での災害対応についてのモデルケース

になり得る災害だと思う」

あまり論じられていない、とても大事な指摘に思える。

ボランティア（よそ者）への不信感

十日町のセンタースタッフから興味深い話を聞いた。それは私も目にしてきたニュースの影響である。

《31日午後7時半ごろ、新潟県小千谷市内2、スーパー「原信」の玄関脇のガラス戸を男がけ破っているのを通りがかった人が見つけて110番し、駆けつけた小千谷署員が器物損壊容疑で現行犯逮捕した。（中略）ビールを買おうとしたが、閉店時刻を過ぎていたため断られたことに腹を立てたという。容疑者は31日に市のボランティアセンターに登録、震災で壊れた神社の片付けなどを手伝ったという》（10月31日付毎日新聞朝刊）

このニュースが広まり、「一部の地域ではボランティアに対する不信

が広がったようだ」と彼は話す。一部の心ない人間の行動で全体がそのように見られるのは残念であるが、

その他にも山古志村では郵便局のATM（現金自動支払機）が壊されるなど、被災地のコミュニティが荒らされる被害が続いており、それらが積み重なった不信感もあるのだろう。「コミュニティが比較的しっかりと形成されている地域では、たとえ善意から訪れるボランティアといえども、ある意味で『よそ者』であり、警戒してしまう傾向もなくなはない」と、長年ボランティア活動に携わっているという群馬県から来た行政職員は話していた。また、前出の後藤君も「ボランティアを受け入れることに、かなりの抵抗感が町民にあり、ボランティアへの依頼ニーズがセンターになかなか上がってこなかった」と感想を漏らしていた。

自己完結型の装備

記者は、事前に報道されていた

「自己完結型の装備」で現地へ向かった（災害ボランティアとして現地入りする際の鉄則でもある）。自己完結型とは、食料・寝袋など自分のことは自分で済ませることのできる装備のことである。水・食料をザックの中に詰めこんで現地へ行ったのだが、そこで見たのはボランティア用にと、分配された救援物資の数々。

パン、カップメン、水など……。震災直後であれば、それらも不足しており、また状況も異なったかもしれない。しかし、記者が現地を訪れた時には供給過剰といった面が否めなかった。救援物資を送付する際は、必ず現地へ問い合わせから送るべきだということを実感。この状況を、国学院大学の学生は「そんなに食べ物があるのなら、何も持って来なくてよかったのかも」と、ぼやいていた。

わが家で生活する人の影で

十日町市では避難勧告が解除され、市街地も道路舗装などの復興作業が

着々と進むなかで、中心地の体育館にはまだ避難生活をしている人がいた。話をうかがうと、

「帰れる人はまだいいのよ。私たちは帰れないんだから」

という言葉が返ってきた。買い物帰りのスーパーの袋をぶらさげた人が通る横で、苛立ちも隠せない。

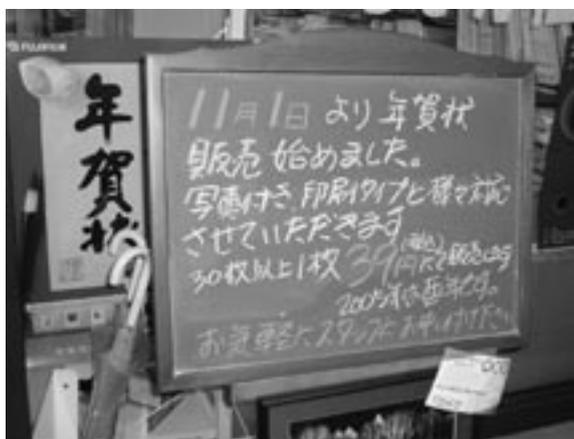
しばらく歩くと、街の写真屋は営業を始めていた。罹災証明（震災の被害を証明するもの）を提出する際に写真の添付が必要になるそうで、「かなり需要がある」とのことであつた。そして店頭には、「年賀状」の販売のお知らせも出ていた。非日常のなかの「日常性」がもつインパクト——それは住民を温かく励ますだろう。

夕暮れ時にさしかかると、居酒屋に電気が点つた。そして、「災害サージャス」の文字が浮かびあがった。「災害に負けず頑張りましょう！ はやく皆様の明るい顔が見られますように！」という熱いメッセージが。

都会にはない温かさと、コミュニティの強さを感じさせられた。

災害ボランティアを志す時は

今回の災害が物語るように、災害はいっ発生するかわからない。その中で、復興に大きな力となるボランティアだが、一歩間違えば足手まとい、二次災害の危険性さえある。そこで、今回記者が感じたことや前出の後藤くん、そして現地スタッフの



年賀状のお知らせもあった

もちろん、現地でボランティアをすることが絶対ではない。募金も大きな力になるのだ。一例をあげると、ボランティアには全員が保険に加入してもらうことになるのだが、その費用(1人500円)は地元で負担するのが通例のようだ。今回のような規模の震災だと、それらをはじめとしたボランティアセンター運

声を総合して、災害時にボランティア活動を志す中大生に対して最低限伝えたいことを挙げてみたい。

① マスメディアやネット上の情報を複眼的に分析する(リテラシー能力が必要ですよ)。

② 可能な範囲で現地のボランティアセンターへ状況を確認する。

③ 自己完結型の装備で(特に地震発生当初は被災地は混乱しています)

④ ゲンキと勇気を届ける活動です。ニコニコ笑顔で!

営にもウン千万円単位の費用がかかるのだ。それらを支えるのは一人ひとりの善意である。

雪国ならではの強さ

冒頭の弁当屋さんには、温かいご飯を求めて地元の被災した方々もやってくる。市内在住の女性に、記者が感じたギモンをぶつけてみた。

—— ボランティアのニーズが少ないようですが、手助けはあまり必要でないのですか?

「とんでもない」と、その人は言うのだった。「いやね、何を頼んでもいいものか。うちだけが被災したわけじゃないし、お隣もそのお隣もみんなじゃない。だから、うちだけ頼むのは悪いと思って。私のまわりはそういう人ばかりよ。それに、どの程度のことまで頼んでいいのかわからないし……」

今回の地震では、マスメディアもセンセーショナルな内容ばかりだけでなく、地元が求める情報を伝える

努力が見受けられたが、やはり情報は十分に被災者に行き届いていないようだ。混乱する状況の中、全ての人が満足するということはないかもしれない。が、これを今後になかすことはできるだろう。

彼女には、その旨をボランティアセンターに伝えることを約束してその場を後にしたが、その言葉には厳しい冬の環境に慣れている、雪国の人々特有の強さを感じた。

さて、記者は念願の温かい「野菜炒め弁当」を手にし、店を出ようとするとご主人とその奥さんから、泊まるどころを聞かれた。「まだ未定である」というと、

「泊まるところがなければ、泊まってもいいよ。汚いけれども部屋ぐらいあるから」。

被災した身でも他人に対する配慮を忘れないやさしさを背に現地を後にした。ぽつと、心を温めてもらったのは僕のほうだった。